



Title	ピジン・クレオール研究略史
Author(s)	林, 正寛
Citation	一橋論叢, 98(1): 97-114
Issue Date	1987-07-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	<a href="http://doi.org/10.15057/12685">http://doi.org/10.15057/12685</a>
Right	

## ビジン・クレオール研究略史

### 一 はじめに

この地球上には、数千にのぼる言語が存在する。それらはさらに、系統関係や言語類型など一定の基準にもとづいて、下位分類される。「ビジン」や「クレオール」と呼ばれる一連の言語も、そのような下位分類のひとつを構成している。このビジンやクレオールについては、最近、専門の研究書が日本語に翻訳されるようになったものの、いまだ広く知られるには至っていないように見える。本稿では、われわれに多くの重要な問題を提起しているこれらの言語について、その研究の跡を振り返りながら、いくつかの問題に触れてみようと思う。

ところで、ビジンとは、あるいはクレオールとはどの

## 林 正 寛

ような言語であるのか。言い換えれば、ある言語は、どのような基準にもとづいてビジンやクレオールと認定されるのか。議論の出発点ともなるべきこの重要な点に関して、研究者のあいだには、残念ながら意見のズレがある。じつは、ビジンやクレオールの定義自体、つねに議論的になってきた問題なのだ。以前デカンブ(D. DeCamp, 1977)は、それらの定義をするかわりに、誰もがビジンでありクレオールであると認めている、いわば模範的な例をあげることから話をはじめた。われわれも、まずはそれに従うことにしよう。

### 一 一 ビジン、クレオールの典型例

デカンブが紹介しているビジンの例は、南スーダンの

ジュバで話されているジュバ・アラビア語である。この言語は、その話し手の誰の母語でもないが、かれらがコミュニケーションするとき頼りにする、補助的な橋わたし言語として機能している。なぜなら、かれらの母語はじつに様々であり、自分自身の母語をもってしたのでは、たがいに通じ合わないからだ。この言語が用いられるのは、主として商取引のような場合なので、その語彙は貧しい。その不足を補う必要が生じたときには、かれら話し手の母語が通常のアラビア語から借りてくる。発音はきわめて単純化し、めんどろな形態音韻論的ルールもほとんどない。アラビア語の複雑な形態論の体系(たとえば、時制や否定を表示したり、主語と目的語両方の人称、数、性を示す働きをする、動詞につく接尾辞)は、ほとんどすっきり排除されている。そういう文法情報は、かわりに語順とか屈折しない孤立語的な代名詞や助動詞とかによって示されるか、あるいは単に無視される。しかしこの言語は、アラビア語のベイビー・トークではないし、それを中途半端に習得した結果でもない。自分自身の構造をもち、それなりに独り立ちしている比較的安定した言語である。アラビア語の話し手といえども、いわば外

国語としてこれを学ばねばならない。以上がビジンの典型例である。

\*

デカンブがあげるクレオール例は、ハイチのクレオールである。この言語は、ほとんどすべてのハイチ人の母語である。ただし、ごく少数のエリートは、この国の公用語であるフランス語を母語とする。このクレオールは、フランス語のビジン化した言語形態が発展したものと考えられている。そして、いわゆる通常言語のそれに引けを取らない、豊富な語彙と複雑な文法体系を備えている。母語にふさわしい広範な伝達欲求を満たしうるように、かつてのビジンが練り上げられた結果であるとみられる。さらに、ハイチのクレオールの語彙の大半はフランス語に由来するが、その音韻論と統辞論は、フランス語のそれとおおきく違っており、このクレオールとフランス語は、もはやたがいに通じ合わないものになっている。それどころか、このクレオールの文法構造は、フランス語のそれよりも、語彙の大半がポルトガル語に由来するポルトガル語・クレオールや、語彙の大半がスペイン語に由来するスペイン語・クレオール、語彙の大半

が英語に由来する英語・クレオールなどの文法構造に、より一層似ている。したがってほとんどのクレオリストは、このクレオールをフランス語の一方言とみることに反対している。これがクレオールの典型例である。

### 一―二 ビジン、クレオールの諸特徴

上の例から、ビジン、クレオールそれぞれの特徴をいくつか指摘することができよう。

\*

ビジンの存在条件として、多言語状況をあげることができる。それも、話し手の数の点で、飛び抜けた言語が存在しないような状況を。このような状況においてビジンのターゲットになる言語（ジュバではアラビア語）は、多くの場合、経済活動と密接な関係にある言語であり、地域内の言語のこともあればそうでないこともある。それは、限られた場面でしか用いられない伝達手段なので、母語に対するのとおなじ規範意識にもとづいて用いられることはない。その結果、伝達の必要にとって余計なものが排除され、ターゲット言語の文法も、その単純化にもなつて編成替えをこうむる。ジュバ・アラビア

語の場合、ビジン化を通じて、屈折語的な総合タイプの文法体系から、語順を重視する孤立語的な分析タイプの文法体系へと姿を変えた。おもえば、フランス語は、総合タイプのラテン語が分析タイプに姿を変えた言語であるし、英語は、もはや屈折語というよりは孤立語といふべき様相を呈している。そしてまた、孤立語の典型とされる中国語（とりわけ北方中国語）もビジン化を経験したという意見もある（橋本萬太郎、一九八五年）。ビジンはもとより、クレオールもこの分析タイプの文法をもっていることを考え合わせると、ビジン・クレオール研究が、比較言語学や言語類型論、個別の言語史研究にとって、きわめて重要な意味をもっていることが分かるはずだ。

さらに、ジュバ・アラビア語と通常のアラビア語の関係についてだが、もし現在のフランス語がブロークンなラテン語といえるのなら、ジュバ・アラビア語もブロークンなアラビア語といえるだろう。しかし、まだ学習が進まず、不完全でおぼつかないアラビア語しか話せないが、いずれ経験をつめば正しいアラビア語を話せるようになるだろう、というようなときの、この中間段階のア

ラビア語をブロークンなアラビア語というとするれば、ジュバ・アラビア語はブロークンとはいいがたい。なぜなら、ジュバ・アラビア語は、より正確なアラビア語をめざしての一段階とは認めがたいからだ。それは、そういうものとして確立しており、すでに独自の規範となっている。その意味で、このビジンは安定しているといえる。

\*

クレオールがビジンと違う点は、上の例からも分かるように、それを母語とする話し手が、ビジンにはないがクレオールにはあるということだ。これが従来の見方であり、いまでも広く受け入れられている観点である。しかし、この点に関しては、付け加えておかねばならないことがある。母語となってもおかしくないほど、広範な伝達要求に応えているビジンの存在だ。たとえば、カメルーンのビジン英語や、バブア・ニューギニアのビジン英語(トクピシン)などがそうであり、クレオール化の恰好のケースとして研究者の注目をあつめている。したがって、ビジンを、ごく限られた用途に用いられる簡略な伝達手段、と決めてかかるわけにはいかない。ビジンのほうが、伝来の母語より広範な機能を果たしている場合

もあるのだ。その場合、そのビジンは、機能の面だけではなく、言語構造の点でも、その広範な機能に見合うほどに複雑化しているのが普通だ。クレオールとこのような段階に達したビジンとの違いこそ、母語として機能しているかどうかなのである。こうして、ビジン・クレオールを一貫したプロセスとしてみると、通常の言語が、機能的にも構造的にも縮み(ビジン化)、なんらかの理由で機能的にも構造的にも膨らみ、母語としての機能を果たすようになり(クレオール化)、クレオールという別の通常言語になる、という図式がえられる。デカンブも、この図式をふまえて、ハイチのクレオールの形成発展を説明している。

クレオールについて、さらに述べておかなければならないのは、クレオール間の構造上の類似性という事実である。研究者はこの事実を説明しようと躍起になっており、現在のクレオール研究はこの問題を中心に展開していると言っても、決して言いすぎではない。この問題は、どのように、そしてなぜ、クレオール諸語の文法構造は似ているのか、という問いに集約される。この点について、筆者はすでに取り上げたことがあるが(林、一九八

五年)、本稿でも折に触れ言及することになろう。

上のハイチのクレオールについては、ディグロスイの問題にも言及しておかなければなるまい。ディグロスイは、いまや社会言語学のキー・ワードであり、ある社会にふたつの言語が存在し、それらがそれぞれ機能を分担しあっている状況を指すタームである(一方の言語は、教育を通じて習得され、話し手から高い評価を受け、主として書き言葉として用いられるが、フォーマルな場面では話し言葉としても用いられる言語であり、他方の言語は、話し手の母語ではあるが、前者のような高い評価は受けておらず、もっぱら日常のインフォーマルな場面で用いられる話し言葉である)。ハイチの場合は、フランス語とクレオールがディグロスイを成しているといわれる。ただし、クレオール社会のすべてがディグロスイ状況にあるわけではない。また、クレオール社会以外の社会はこの状況とは無縁、というわけでもない。この概念を初めて言語研究の場に紹介したファーガソン(C. A. Ferguson, 1959)がディグロスイの例としてあげたのは、このハイチと、ドイツ語圏スイス、ギリシャ、エジプトの言語状況であった(クレオールとディグロスイの問題

については、林(一九八三年)を参照のこと)。

\*

ここまで、ビジンとクレオールそれぞれの典型例と、その例からうかがえるビジンとクレオールの特徴のいくつかを述べてきた。それを踏まえて、これらの言語が、これまでどのように研究されてきたかを振り返ってみることにしよう。

## 二 ビジン・クレオール研究略史

### 二一 前史

クレオールの文法が最初に書かれたのは、一七七〇年。所は、当時デンマーク領だったカリブ海のヴァージン諸島(現在はアメリカ領)。この地には、一七世紀後半の入植以来、オランダ人プランターとその奴隷が住みついていた。したがって、このとき書かれたのはオランダ語・クレオールの文法(モデルはラテン語文法)である。そしてそれを書いたのは宣教師だった。宣教師の手によって初めてその文法が書かれた言語のケースは、いわゆる第三世界にはたくさんある。クレオールもそのひとつだったわけだ。この時代にクレオールにかかわったのは、

宣教師をはじめ、旅行家、探検家、船乗り、商人といった人々である。言語学者とはいえば、ようやくヨーロッパに近代的な言語学が生まれつつあった頃であり、まだかれらの出る幕ではなかった。

異国趣味の対象としてクレオールに関心を示す傾向が、一九世紀初め、植民地の「古き良き時代」の頃生じ、一種の流行となった。クレオールのことわざやお話、唄などが収集され、会話集が編まれた。また、フォンテーヌの寓話がクレオールに訳されたのも、この頃のことである。

一九世紀も後半にはいると、クレオール研究はにわかには活気づく。クレオール語法をまじえて小説を書く者がいるかとおもえば、クレオールだけで書かれた作品も登場する。また、ラフカディオ・ハーンのようなジャーナリスト(当時かれは、ニューオーリンズで新聞記者をしていた)が、クレオール文化やクレオール社会についてルポルターージュを書く。こうして、クレオール関係の情報に飛躍的に増大した。一方、当時の言語学も、「比較」という方法原理に立脚して、ますます自らを鍛えあげていたが、ビジンやクレオールに関心をしめず言語学者と

なるとわずかしかなかった。ビジンにしろクレオールにしろ、まっとうな研究対象とはみなされていなかったのである。その話し手になりたいする偏見や軽蔑の念が、その言語にも及んでいた。そんななかにあつて、敢然とビジン・クレオール研究に手を染めたのが、シュールハルトだった。しかし、かれ以外の、同時代の研究にみるべきものがなかったということでは、もちろんない。当時の言語学のスタイルを反映して、カリブ海域のいくつかのクレオールの比較研究がなされたし、当時もっともモダンな学問のひとつだった近代音声学の方法を、クレオールに適用した研究者もいた。個々のクレオールの文法も、もはやラテン語文法ではなく、そのクレオールに語彙を供給したヨーロッパの言語の近代文法をモデルにして、前の時代より一層くわしく記述されるもした。しかし、「ビジン・クレオール研究の父」と呼ばれるに値するのは、やはりシュールハルトをおいて外にはいない。(一九世紀後半のビジン・クレオール研究の状況、及び次節のシュールハルトの研究ぶりについては、林(一九八四年)を参照のこと)

## 二一二期 初期

シュールハルトは、言語の研究といえは言語史の研究を意味する時代に、ビジン・クレオールの研究をした。そもそも、かれがこれらの言語に興味を覚えたのも、その研究がロマン諸語の形成史の研究に役立つと考えたからだ。周知のように、ロマン諸語はラテン口語から分裂・発展したとされる。そして、ロマン諸語間に差異の生じた原因のひとつとして、ラテン語のひろまった地域の基層語(その土地の先住民族が、ラテン語を話すようになる前に話していた言語)の影響が問題にされた。シュールハルトは、クレオールの発展のなかに、この基層語の影響をみようとした。奴隷がヨーロッパの言語を話そうとして、知らず知らずのうちにその基層語の影響を蒙ってできたのが、クレオールではないかと考えたのである。しかしまた同時に、ヨーロッパ人の側が、相手にあわせて、自分の言語をみずから簡略化した可能性も考慮にいれていた(この後者の考えかたは、後のブルームフィールドやホールに引き継がれ、乳母や母親が幼児に話しかけるときに用いる、舌足らずの簡略な話し方(ベイベー・トーク)に比せられた)。すなわち、文化的背

景を異にする人々の接触から生じた混成的な言語現象を、それぞれの民族的影響(ethnologische Einflüsse)の結果として分析しようとしたのである。

その一方でシュールハルトは、さまざまなクレオールが類似の文法構造を発達させていることにも、当然ながら気付いていた。しかし、一般に基層語は差異をうみだす原因とみなされていたし、ベイベー・トーク論は、状況の類似性を説明することはできても、文法構造のそれを説明できるとはかぎらない。この問題についてシュールハルトは、今後の研究課題だとしている(H. Schuchardt, 1900)が、結局は、どうやら、ヨーロッパ人の側が果たした役割を重視しようとしたようにみえる。すなわち、カリブ海やインド洋の島々では奴隷にたいして、また西アフリカ沿岸やメラネシアの島々では「土人」にたいして、ヨーロッパ人は、そのつど勝手気ままに自分の言語を簡略化しているようにみえるが、じつは無意識のうち、なんらかの一般的な原理にしたがってそうしたのだ、となるうか。この普遍論を思わせる論点は、シュールハルトによってさらに掘り下げられることもなく、その後ながら、かえりみられずにおかれた。



シュールハルトは当時高名な言語学者の一人であり、かれの学問が及ぼした影響は、決して小さくはなかった。しかし、そのビジン・クレオール研究に話をかざれば、これらの言語に関して、四〇点にものぼる論文（書評文をふくむ）が発表されていながら、当時さしたる反響があったようにもみえない。なぜか。シュールハルトが、その論文のあちらこちらに、きらりと光る洞察をしのばせるにとどめ、あえて理論的なモデルを提起しなかったことも、確かにその一因になっていたであろう。しかし、やはり、ビジン・クレオール自体が、研究対象として、相変わらずごく周辺のな位置しかあたえられていなかったことに尽きるのではないか。そのような状況にあって、シュールハルトを批判したメイエについては、ここで少し触れておく必要がある。

メイエは、言語の系統関係を論じるにあたって、シュールハルトのいう「混合語」という概念を問題にし、「シュールハルト氏は、話す主体の観点ではなく、言語の観点に身を置いてゐる。」(A. Meillet, 1921)と評した。すなわちメイエは、シュールハルトを、自分が話している言語についての話し手の感情や、それを話そうとするかれ

の意志を軽視し、借用、模倣、外来の影響などの結果として言語間に介在する、混合といううわべの言語現象を重視しているとして、批判したのであった。メイエにとって言語の系統とは、自他の言語の要素を識別できる話し手の、前の世代とおなじ言語を、そして同一の言語共同体に属する仲間とおなじ言語を話しているのだという、感情や意志を前提にしたものである。「『言語の系統』を決定するのは何であるかといえば、「世代から世代へと」継承された、ある言語を話すのだという意志の、その言語的な表れである発音と文法の間断なき存続をいってほかにはない。」(A. Meillet, 1914)というわけだ。ここには、ある言語は、その話し手の感情や意志の点でも、その言語体系の点でも、ひとつの言語にのみさかのぼりうるものであってふたつの言語にはない、という考え方がはっきりと表れている。ゆるぎないアイデンティティーの表現でもあるこの観点は、言語学という専門の枠をこえて、ひろく一般に受け入れられてきた（同時に、一般化していた考え方を、言語学の側ですくいあげ整理したという面もあったであろう）。シュールハルトは、いろいろな言語現象を材料にしてこの観点に挑戦したわけ

だが、相手を組み伏せるには至らなかった。

### 二一三 中期

シュールハルトが没して（一九二七年）からは、しばらくのあいだ、ビジンやクレオールの研究に手を染める言語学者もいなくなった。ただ、その後のビジン・クレオール研究におおきな影響をおよぼした書物が、この時期に著された。ブルームフィールドの『言語』(L. Bloomfield, 1933)である。この書のなかで、ビジンやクレオールの議論に割かれたのは、わずか数ページ(pp. 472-475)にすぎない。しかし、かれの影響力のおおきさもあって、後の研究者は、数百ページの重みを感じるようになった。行動主義にのっとったブルームフィールドの言語観は、当然ビジンやクレオールにたいする見方にも反映している。かれによれば、奴隷などの劣勢な立場にある話し手は、優勢な立場にあるヨーロッパ人の言語を完全に模倣できずにブロックな話しかたをし、それを耳にするヨーロッパ人は、かれらは自分達の言語（ヨーロッパ語）を正しく話す能力がないとみて、かれらにたいしてベイビー・トークをもちいる。それを聞いて奴

隷達は、そのベイビー・トークこそ正しい言語なのだと思つて、それをまた模倣する。こうして、もとのヨーロッパ語とは随分へだたった、簡略な言語が生ずるようになった。すなわち、たがいの母語では通じ合えない両者が、上下の関係を成して接触し、上に立つ言語を、両者が交互に、不正確にかつ簡略に用い合つた結果が、ビジンであり、クレオールであるというわけだ。

この考えかたは、ポスト・ブルームフィールドイアンのひとりであるホールによって踏襲され、かれの研究を通じてさらに一層広められることになった。シュールハルト同様ロマニストとして出発したホールは、太平洋戦争のさなか、アメリカ軍の後援を得てメラネシアのビジン英語の研究に取り組んだ。その後、かれの研究対象は、オーストラリア、ミクロネシア、中国などのビジン英語や、スリナム、ハイチなどのクレオールにまで及んだ。

おなじ頃、カリブ海地域のクレオールの研究に取り組んでいたテイラーは、ホールに代表されるビジン・クレオール研究の主流に異議をとなえ、クレオールの起源をめぐって論争をいどんだ。

テイラー(D. Taylor, 1956)は、ビジンは誰の母語で

もないし、クレオールはその誰の母語でもないビジンから発展したのだから、これらの言語は、メイエ流の言語系統観にはなじまないとした。そして、ヨーロッパ人の目には、自分自身の言語の文法パターンのはなはだしい簡略化と映るものも、実際には、いくつかの西アフリカの諸言語に共通した文法パターンが、保存されたものである可能性があるとして、発生的にはいわば「孤児」であるこれらの言語は、養い親をふたり持っているようなものだという。一方は、基本的な形態論的パターンや統

辞論的パターンを留意し、他方は、基礎的な語彙を提供する。そして、接触している両グループが、社会的ないしは政治的に対等でないとき、相手と意志の疎通をはかろうと、より大きな努力をはらうのは下位グループの方であり、かれらは、相手の言語の、より見えやすい部分である語彙を、自分自身のパターンにもとづいて解剖しやりくりした。その結果生じたのがビジンであり、その発展形態であるクレオールだとすれば、クレオールが、たがいに異なる語彙を持ちながら文法構造の面では似通っているのも、納得がいくというわけである。要するに、ビジンやクレオールは、その文法構造にもとづくかぎり、

ヨーロッパ語ではなくアフリカ語であり、メイエ流の系統論の前提である「母語としての連続性」には、その出発点において反しており、そういう系統論の枠組には収まらない言語である。

このテイラーの考えかたに、ホールは反論する (A. Hall, Jr. 1958)。かれは、結論的にいえば、フランス語・クレオールにとって系統上基本的な関係にあるのは、一七世紀のフランス語であり(語彙に関しては、一九世紀と二〇世紀のフランス語と関係がある)、初期のビジン・フランス語の話し手を通じて、アフリカの言語構造も持ち込まれはしたが、それは表面的な部分にしか関係しない、と考える。同様に、英語・クレオールにとっては、英語がその基礎にある。したがってホールは、さまざまなクレオールのあいだにあきらかな類似性があることは認めながら、テイラーのように、それを、これらクレオールの基本的な言語構造の共通の源泉とはみずら、たまたま共通のアフリカ基層が顔をだしたにすぎないともみなす。すなわち、ビジンやクレオールは、アフリカ基層のためにたがいに似通ってみえるが、本質的には、英語やフランス語など、個々のヨーロッパ語の系統に属

することになる。

シュールハルトとメイエの論争の再現ともいえる、このテイラーとホルルの論争を通じて（ただしテイラーは、普遍論を示唆したシュールハルトには気付いておらず、ホルルは、メイエのメンタリスティックな傾向をしりぞけた）、ビジンやクレオールはどのように生じたのか、またこれらの言語は、どのような基準にもとづき、どのように分類されるべきなのか、といった問題が、研究者のあいだでさらに一層意識されるようになった。と同時に、比較言語学や構造言語学の方法についても、シュールハルトやテイラーの問題提起をふまえ、さらに検討をくわえる必要が痛感されるとともに、それらの方法にとらわれない新たな方法の必要性も意識されるようになった。

## 二―四 現在（一）

チョムスキーが華々しく言語学の世界に登場し、言語研究のスタイルがおおきく揺さぶりをかけられ始めた頃、ビジン・クレオール研究に関する最初の国際会議が、ジャマイカでひらかれた（一九五九年）。そしてこれを機に、ビジン・クレオール研究は、独自の研究分野として

自らを押し出していくことになる。他方、言語内的な要

素と言語外的な要素の相互連関を記述分析しようとする社会言語学的な研究も、ようやく盛んになり、すでに言及したディグロスイの場合のように、多くの点で、ビジン・クレオール研究と接点をもつようになる。さらに、社会言語学で取りあげられる、バイリンガリズムや、少数民族の言語、言語にたいする態度（意識）、言語とアイデンティティーなどの問題や、脱文盲化、標準語の整備と標準語教育、正書法の確立といった言語政策や言語教育に関する問題も、ビジンやクレオールと深くかわる問題として、頻繁にとりあげられるようになる。こうしてビジンやクレオールは、社会言語学の重要な研究対象にもなり、その発展に貢献することになった。

一方、最初からビジン・クレオール研究の重要なテーマであった、その形成発展の問題やその構造上の類似性の問題に関しても、五〇年代から六〇年代にかけてのこの時期に、あたらしい仮説が提起された。「語彙差し替え説」がそれである。

この説のかなめは、一五世紀のポルトガルのアフリカ進出にともなって、西アフリカでビジン・ポルトガル語

が用いられるようになったと仮定したことである。さらに付け加えるなら、文法構造と語彙という従来からの二分法にのっとって、さしずめ前者を肉体に後者を着物にたとえ、着せ替え人形よろしく、ビジン・ポルトガル語の文法構造という肉体に、それぞれ英語やフランス語、オランダ語などの語彙という着物を着せるという、発想の妙も注目に値しよう。それもこれも、語彙は異なるが文法構造は似ているという、クレオール諸語の特徴を説明せんがためである。

「語彙差し替え説」には、印欧比較言語学のアナロジイという面もある。この説は、後者と同様、一元起源論の立場をとり、後者が印欧祖語を方法論上必要としたように、この説は、ビジン・ポルトガル語を必要とした。しかしこのビジンは、歴史的な状況証拠にもとづいて想定されたものであるだけに、いまだその存在が実証されていないことや、カリブ地域以外の、たとえばハワイの英語・クレオールとの歴史的関係の薄さなどが、この説の弱点となっている。それにもかかわらずこの説は、個々のビジンやクレオールを、それらに語彙を提供したヨーロッパの言語との個別の直接的な結びつきから切り離し、

「ビジン・クレオール」として統一的にとらえようとする気運をおおいに刺激することに貢献したのである。

六〇年代を通じて、ビジン・クレオールに関心をもつ研究者が多くなった。もはや、シュールハルトやホールのような、時代を代表する個人の仕事が影響力を発揮し、それによって研究全般がリードされるという状況は、消えうせた感があった。広範な研究成果をうみだしていたクレオリストたちは、所もおなじジャマイカで、二回めの国際会議をひらいた。一九六八年のことである。そこで発表された論文は、経験ゆたかな社会言語学者ハイムズによって編集され、出版された (D. Hymes, 1971)。この論集の出版によって、ビジン・クレオール研究は、名実ともに学問分野としての市民権を得たといえよう。四〇本にのぼるそれら論文のなかには、初めて紹介されるビジンやクレオールの記述にまじって、ウィットナム (K. Whinnom, 1971) や、ファーガンソン (C. A. Ferguson, 1971)、『ガンハーズとウィルソン (J. J. Gumperz & R. Wilson, 1971)』、『アリーソン (M. C. Alleyne, 1971)』の、その後の研究におおきな影響をおよぼすことになる論文が含まれていた。かれらの研究は、いずれもプロセ

スを、それぞれの観点から問題にしたものである。ウィトナムは、どのような条件のもとで、ビジン化が生じ安定化するかを論じ、ファーガソンは、コーピュラの欠落をめぐって、ベイビー・トークなどにみられる簡略化のプロセスと、ビジン化のそれとを関連させて論じた。またガンパーズらは、インドのある村における、印欧語系のウルドゥー語、マラーティー語と、ドラヴィダ語系のカンナダ語とのあいだの収束現象 (convergence) をとりあげ、それとクレオール化との関連を問題にし、アリンは、クレオール化の前提であり、それを支える基盤として機能する、文化変容 (acculturation) の問題を論じた。こうしてビジン・クレオール研究は、これらの研究をバネにして、もはや一時の流行でもなく、言語学の片すみにひっそりとうづくまる物珍しい研究分野でもなく、言語の、言語と人間の、そしてまた言語と社会の、その根幹にかかわる問題を追及する分野として、ますますその必要性と重要性の度を高めていった。

## 二一五 現在 (二)

七〇年代にはいると、ビジンやクレオールをテーマに

した国際会議や研究会が、頻繁にひらかれるようになる。なかでも、七五年にハワイで行われた会議と七九年にヴァージン諸島のセント・トマス島でひらかれた会議は、重要なものである。そこで発表された論文は、前者はドイツによって、後者はヴァルドマンとハイフィールドによって、それぞれ編集され出版された (R. Day, 1980/A. Valdman & A. Highfield, 1980; A. Highfield & A. Valdman, 1981)。さらに、*英語編集者を得て*、論文集もかずかず出版されている。個人の研究にいたっては、もはや枚挙にいとまがない。一九七五年に、ライネッケらによって、原則として一九七一年末までに出版された、ビジン・クレオールに関する文献のビブリオグラフィが編まれたが、八〇〇余頁にもなる大部なものであった (J. E. Reinecke et al., *A Bibliography of Pidgin and Creole Languages*, U. P. of Hawaii)。それ以降発表された文献の目録を編むのに、もちろんこれほどのページは必要ないだろうが、すでに相当な数にのぼっていることだけは確かである。

現在のビジン・クレオール研究は、言語研究の一環として、言語学の一分野という性格をいまだ保持しては

るが、社会言語学や心理言語学はもちろんのこと、他の学問分野と接点をもちうるテーマにも触手をのばしている。これは、ビジン・クレオール形成発展の歴史や、これらの言語が話されている地域や社会において、その話し手がどのような状況に置かれてきたかを考えてみれば、当然のことである。そんななかにあつてひとときを目立つのが、七〇年代の半ば以降、普遍論の立場から、言語のバイオ・プログラム論を唱えているピッカートンの存在である（かれの立脚点については、すでに言及した林（一九八五年）を参照のこと）。最近の、日本におけるビジン・クレオール研究の受け入れかたも、かれの所説を中心になされてきている（ピッカートン（一九八五年）および月刊『言語』一九八五年十一月号）。

ピッカートンのクレオール化論によって、クレオール間の構造上の類似性の問題も、あらたな展開をみせることになる。かれは、「語彙差し替え説」が、ミッシング・リンクとしてビジン・ポルトガル語を想定したように、説明原理として、ある条件の下で子供が母語を獲得するときに発動される、大脳に生得的に組み込まれた、人間という種にとって普遍的な、言語のバイオ・プログラム

を想定する。したがって、このプログラムは、無標の（unmarked）形式だけから成っていることになる。諸言語が表面上異なってみえるのは、子供が社会化する過程で、その社会に特有の有標の（marked）形式が、無標形式に取り替わったり、それを変質させたりするからだとする。通常の言語社会に生まれた子供もこのプログラムの洗礼を受けるわけだが、それは一瞬のことであり、すぐにかき消されてしまうのに対し、クレオール社会では、この社会特有の事情のために、クレオールという言語形態として実現し、保持されてきたのだという。クレオール諸語の示す類似の文法構造は、したがって、このプログラムがあらわな形で実現したものと解される（この観点をほるか人類の誕生の時代にまで投影させて、ピッカートンは言語の「ルーツ」をさえ論じた）。こうしてピッカートンは、基層論や、語彙差し替え説にみられる伝播論をしりぞける。それらの議論が重視している要因は、いずれも二次的なものだというわけである。

ピッカートンが材料として用いたのは、主としてハワイの英語・クレオールである。ハワイでクレオール化が問題になるのは、今世紀初頭であるとし、当時生まれた

子供達は、深刻な多言語状況のなかで、もはや親の母語を獲得する動機づけもたず、といって橋わたしの役割を果たしてくれるビジンも手近にはなく、バイオ・プログラムにのっとって、自らクレオールを創造せざるをえなかったとする。ピッカートンはこのように、ビジンからクレオールへという、従来のクレオール化論の図式をしりぞける。これにたいしては、ハワイの場合も、クレオール化に先立って、ビジンが存在していた可能性が強いという反論がある。ホーム (J. Holm, 1986) は、ピッカートンが自分の理論の根拠にしたデータは、移民として後発組の日本人やフィリピン人から得たものであり、不適當だと批判する。すなわち、それ以前にやってきた中国人(中国の沿岸部で用いられていたビジン英語を持ち込むとともに、カリフォルニアからやってきた中国人も多く、かれらは、カリブ地域の英語・クレオールと密接な関係をもつビジン英語を知っていたと思われる)とポルトガル人が、すでに安定したビジンを用いていたはず、というわけである。ホームは、あきらかに伝播論の立場にたつとともに、アフリカの基層語の影響も重視している。

しかしピッカートンは、どのような言語を話す人々が、いつどこにいて、問題の言語に影響をおよぼしたかが明らかにされないかぎり、基層語の影響を論じても意味がないと、かねがね基層論を批判してきた。たしかに従来は、クレオール語と類似の文法構造をもつアフリカの言語として、二、三の言語がいささか恣意的にとりあげられてきた感がある。この種の批判に応えるべく、ボーデ (M. Baudet, 1981) は、いくつかのアフリカ言語をとりあげ、それらが共通に示す文法構造が、クレオール諸語に共通して見出せるそれと類似していることを示そうとした。

これらの議論をふまえたギルマン (C. Gilman, 1986) は、ピッカートンの普遍論を全面的に否定はしないが、そのみに基づいて理論を組み立てることには、反対する。また、単一の言語や言語群に影響をおよぼした基層とみる見方も、現実的ではないとしてしりぞける。そのうえで、アフリカのさまざまな言語にひろく分布している、アフリカという地域に特徴的な言語現象 (areal features) の重要性を説く。それは、統辞論、音韻論、意味論の各方面にわたって確認でき、その多くが、大西洋



をさんで分布するビジン・クレオール形成時に、アフリカ人の話し手によって選択され、維持されてきたとする。アフリカの諸言語間には、長期にわたって大規模な収束現象が生じており、したがってアフリカ人から見れば、この収束化のプロセスに、比較的最近、ヨーロッパの諸言語をあらたに巻き込んだだけのことなのだ。

とかく従来は、ヨーロッパ人、ヨーロッパ文化、ヨーロッパ語の系を上におき、それに対し、たとえば、アフリカ人、アフリカ文化（しばしば、これは無視されてきた）、アフリカ語の系を下におくという図式の中で、ビジン・クレオールの形成発展を論じることが多かった。その点ギルマンは、少なくともビジンが形成される時期の西アフリカでは、両者は対等であったとし、その形成に際しても、イニシアチブをにぎっていたのはアフリカ人の側であったという。伝統的な村を離れ、交易の盛んな大きな町に出てきた、さまざまな母語をもつ人々にとって、ビジンは、橋わたしの機能を果たす一方、ヨーロッパにも村にも属さない、ネオ・アフリカ的としか言いようのない、かれらの新しい生活世界の象徴であり、それを表現する手段でもあった (C. Gilman, 1979)。伝統

的なるものからヨーロッパ的なるものへ、という物差し一本だけですべてを測ることは、できないということだ。

最近のビジン・クレオール研究は、ユニヴァーサルをめぐる理論的な議論に傾く傾向が強いが、これまで当然視されてきた観点をあらためて問題にし、それにかわる視点を与えようとする試みも、いろいろとなされている。上のギルマンの場合もその一例であるが、それらに共通して言えることは、ヨーロッパ人との接触の結果生じた言語事象に関して、アフリカ人やアジア人、アメリカ人（インディオ）の果たした役割を、従来のように受動的なものとせず、逆に、能動的な役割を果たしたとして、高く評価しようとしていることである。これは、アイデンティティやエスニシティを扱った社会言語学的な研究について、特に言えることだ。いま最も望まれているのは、これら言語の象徴性にふかく配慮した研究であろう (Cf. W. Washabaugh, 1980; Le Page & Tabouret-Keller, 1985; Suttcliffe & Wong, 1986)。

あとがきにかえて

上では、主として言語学プロパーからするビジン・ク

レオール研究を振り返ってきた。そこには、一元論対多元論、合理論(演繹主義)対経験論(帰納主義)、メンタリズム対メカニズムなど、ヨーロッパの知的伝統にねざす様々な対立が、あるときはそのまま、またあるときはいくつか組み合わされて、表れているのがみてとれた。なるほどビジン・クレオールは、言語研究の恰好の「実験室」である。だがその反面、抽象度の高い理論に関心が向けば向くほど、生身の人間の姿は視野から消えていくことになる。たとえば、ヨーロッパのかつての宗主国に移り住んだビジンやクレオールの話し手は、自分達を一段低く見ることに慣れきっている社会や文化と闘い、アンビバレントな感情に引き裂かれそうになる自分自身と闘い、結局、今日を今日たらしめている「歴史」と闘わざるをえなくなる。そのかれらの目には、この「実験室」はどう映っているだろうか。このような問いかけが意識されるようになったのも、ごく最近のことである。そのこと自体、主として外来者によるビジン・クレオール研究の従来のみであったが、どのようなものであったかを物語ってしよう。

〈参考文献〉

- Aleyné, M. C. 1971. Acculturation and the cultural matrix of creolization, in Hymes (1971), pp. 169—186.
- Baudet, M. M. 1981. Identifying the African grammatical base of the Caribbean creoles: a typological approach, in Highfield & Valdman (1981), pp. 104—117.
- レヴェッタ・モッカーマン(寛・西光・和井田共訳)『言語のルーツ』大修館書店、一九八五年。
- Bloomfield, L. 1933. *Language*. New York: Holt.
- Day, R. R. (ed.) 1980. *Issues in English creoles: papers from the 1975 Hawaii conference*. Heidelberg: Groos.
- DeCamp, D. 1977. The development of pidgin and creole studies, in Valdman (1977), pp. 3—20.
- Ferguson, C. 1959. Diglossia, *Word* 15: 325—340.
- ……. 1971. Absence of copula and the notion of simplicity: a study of normal speech, baby talk, foreigner talk, and pidgins, in Hymes (1971), pp. 141—150.
- 月刊『言語』(特集・シンポジウム)「大修館書店」一九八五年十一月号。
- Gilman, C. 1979. Cameroonian Pidgin English: a neo-African language, in Hancock (1979), pp. 269—280.
- ……. 1986. African areal characteristics. Sprachbund, not substrate? *Journal of Pidgin and Creole Languages* 1: 33

- 50.
- Gumperz, J. J. & R. Wilson. 1971. Convergence and creolization: a case from the Indo-Aryan/Dravidian border, in Hymes (1971), pp. 151—167.
- Hall, R. A., Jr. 1958. Creolized languages and "genetic relationships", *Word* 14: 367—373.
- Hancock, I. F. (ed.) 1979. *Readings in creole studies*. Ghent: Story-Scientia.
- 橋本萬太郎「ロミン・タレオルト現象」月刊『言語』一九八五年十一月号、八〇—八二頁。
- 林 正寛『ディタロニア』とタレオルト研究』『一橋研究』(第七卷・第四号)、『昭和五十八年一月、一三二—一四六頁。』
- ……「フーコ・ニター・ンレ・カデ・キ・ン」、『女子美術大学紀要』(第十四号)、『昭和五十九年三月、一—二二頁。』
- ……「最近のロミン・タレオルト語研究」、『女子美術大学紀要』(第十五号)、『昭和六十年三月、三二—五四頁。』
- Higfield, A. & A. Valdman (eds.) 1981. *Historicity and variation in creole studies*. Ann Arbor: Karoma.
- Holm, J. 1986. Substrate diffusion, in Mynsken & Smith (1986), pp. 259—278.
- Hymes, D. (ed.) 1971. *Pidginization and creolization of languages*. London: Cambridge U. P.
- Le Page, R. B. & A. Tabouret-Keller (eds.) 1985. *Acts of identity*. Cambridge: Cambridge U. P.
- Meillet, A. 1914. Le problème de la parenté des langues, in Meillet (1921 b), pp. 76—101.
- ……. 1921 a. Les parentés de langues, in Meillet (1921 b), pp. 102—109.
- ……. 1921 b. *Linguistique historique et linguistique générale*. Paris: Champion.
- Mynsken, P. & N. Smith (eds.) 1986. *Substrata versus universals in creole genesis*. Amsterdam: John Benjamins.
- Schuchardt, H. 1909. Die Lingua Franca, *Zeitschrift für romanische Philologie* 33: 441—461.
- Sutcliffe, D. & A. Wong (eds.) 1986. *The language of the black experience*. Oxford: Blackwell.
- Taylor, D. 1956. Language contacts in the West Indies, *Word* 12: 399—414.
- Valdman, A. (ed.) 1977. *Pidgin and creole linguistics*. Bloomington: Indiana U. P.
- ……. & A. Higfield (eds.) 1980. *Theoretical orientations in creole studies*. New York: Academic Press.
- Washbaugh, W. 1980. Brainstorming creole languages, in Valdman & Higfield (1980), pp. 129—138.
- Whinnom, K. 1971. Linguistic hybridization and the 'special case' of pidgins and creoles, in Hymes (1971), pp. 91—115.

(女子美術大学助教授)